

明治記念大磯邸園の概要について

① 明治記念大磯邸園の概況、大磯について、邸宅の概況

② 明治記念大磯邸園基本計画の概要

明治記念大磯邸園の概況

明治記念大磯邸園は、**旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)**、**旧大隈重信別邸・旧古河別邸**、**陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸**、**西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸**に係る建物群及び周辺の緑地等(計画区域全体:約6.2ha)。

なお、計画区域には、大磯町が都市計画決定を行った公園区域に加え、「大磯こゆるぎ緑地」及び「稻荷松緑地」等の小淘綾海岸松林特別緑地保全地区の一部の区域(約0.9ha)を含む。

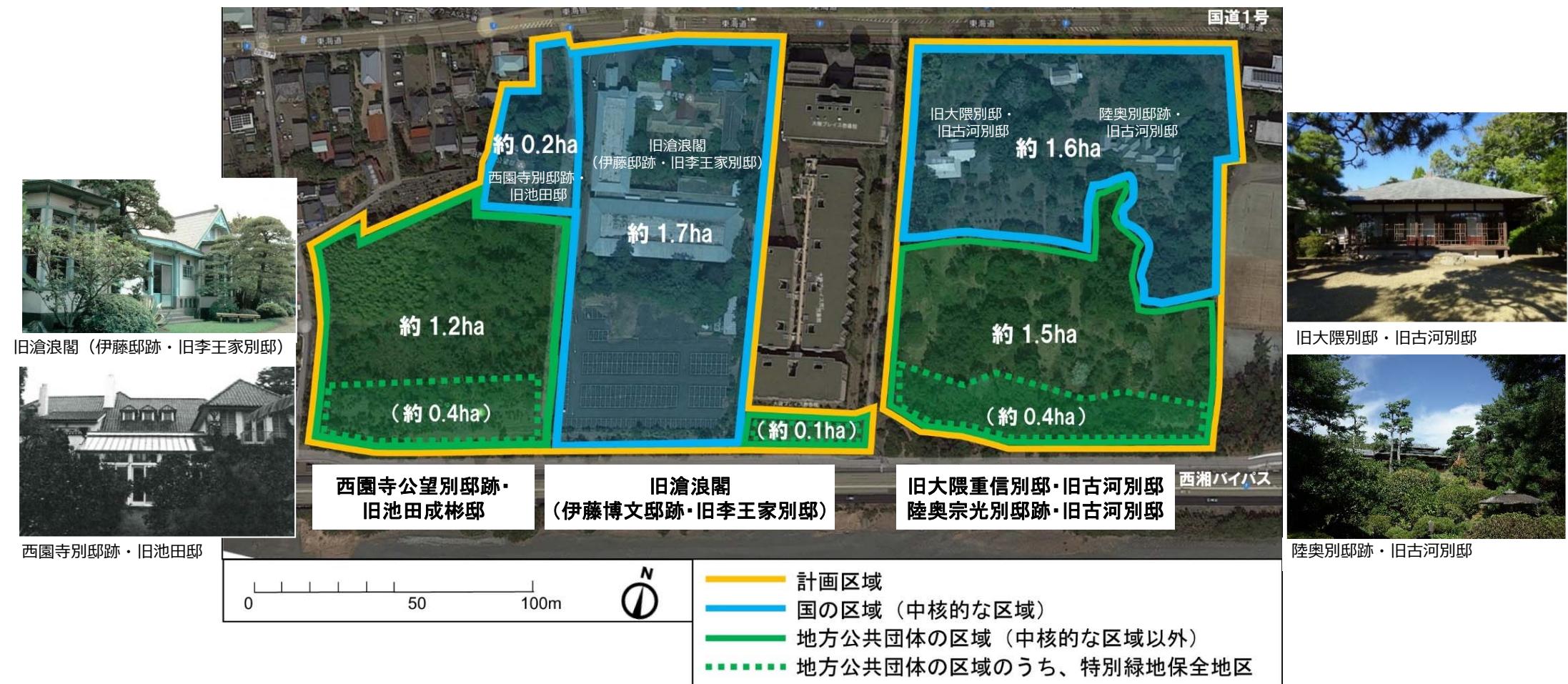


図 明治記念大磯邸園における国と地方公共団体の役割分担

明治記念大磯邸園が立地する大磯の歴史について

大磯は、明治期に海水浴場が開設されて以降、別荘地として発展し、初代内閣総理大臣の伊藤博文をはじめ、8人の総理大臣経験者が建物を所有するなど、「政界の奥座敷」とも言われた。特に、伊藤博文は、我が国の立憲政治の確立に最も貢献した先人の一人とされており、明治29年(1896年)に滄浪閣(別荘)を大磯に建設し、翌年には本邸としたことが契機となり、政財界人等の別荘が急増。

奈良時代

「よろぎ(ゆるぎ、こゆるぎ、こよろぎ)の磯」と呼ばれ、万葉・古今・新古今などの歌にも詠まれた



白砂青松のこゆるぎの浜

江戸時代

東海道沿いに松並木を整備



東海道の松並木

明治18年(1885)

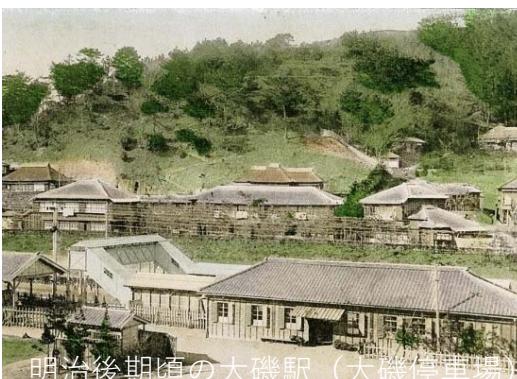
日本初の海水浴場が開設



明治中期の大磯海水浴場（稲籠館繁栄之図）
(大磯町郷土資料館所蔵)

明治20年(1887)

大磯駅開業、「政界の奥座敷」と呼ばれるほど発展



明治後期頃の大磯駅（大磯停車場）



伊藤博文と滄浪閣

旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)

- 初代内閣総理大臣である伊藤博文が明治29年(1896)に別荘を小田原から大磯に移転し、「滄浪閣」と名づけた。明治30年(1897)には本籍を移して本邸として使用。明治を代表する政治家などが盛んに「大磯詣」を行った。
- 伊藤の没後は李王家(李垠)に譲渡され、李王家別邸として使用していたが、大正12年(1923)の関東大震災により倒壊し、その後建て直された。
- 第二次世界大戦後は、民間企業により商業施設として増改築がされている。



伊藤博文邸(国立国会図書館提供)



明治期の伊藤博文邸「滄浪閣」(大磯町提供)

明治18年(1885)に初代総理大臣に就任。内閣制度の創設(明治18年)、明治憲法の起草(明治20年)をはじめ、立憲政治の黎明期に大きな役割を果たした。

「滄浪閣」の由来

中国古代の詩集「楚辭」にあるとされ、青々とした波(滄浪)が綺麗なときは冠の紐を洗い、濁っているときは足を洗うという意味から、何事も自然の成り行きに任せて身を処するとの意味を表している。

旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)の諸元

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	約5,500m ² (約1663坪)	約17,280m ² (約5,230坪)
延床面積	主屋(和風):約287m ² (87坪) 主屋(洋風):約231m ² (70坪)	1,254m ² (旧李王家別邸及び増築部分) 4,572m ² (商業施設)
建築年	明治29年(1896)	旧李王家別邸:大正15年(昭和元年)(1926) 商 業 施 設:平成4-7年(1992-1995)
構造	主屋(和風):木造平家建 茅葺 主屋(洋風):レンガ造2階建瓦葺	旧李王家別邸:木造平屋建 鉄板葺一部瓦葺 商 業 施 設:S造一部RC造 銅板葺
設計者	不詳	旧李王家別邸:中村與資平(監修:宮内庁内匠寮)
施工者	不詳	旧李王家別邸:多田工務店
その他	—	一部(李王家別邸部分)が大磯町指定有形文化財



園庭(明治末期)



大磯滄浪閣の西洋館



明治末期の五賢堂



1992年頃の滄浪閣

(出典:伊勢田博司氏提供:大磯町郷土資料館「伊藤博文没後100年記念滄浪閣の時代」図録 2009)

(出典:大磯教育委員会『大磯のすまい』1992)

旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)の現況

- 昭和26年(1951)に民間企業が購入した後、商業施設として利用されるにあたって度重なる増改築が行われた。
- 現在、邸宅を囲むように、RC造の商業施設が増築されている。
- 邸宅内部は間仕切りや仕上げ材等は改変が見られるものの、南側の和室棟・洋室棟を中心に大正期のモダニズムの雰囲気を良く留めており、別荘地大磯の代表的建築として、平成20年(2008)には大磯町指定有形文化財に指定されている。



洋室棟南側外観（2018年撮影）



商業施設外観（2018年撮影）

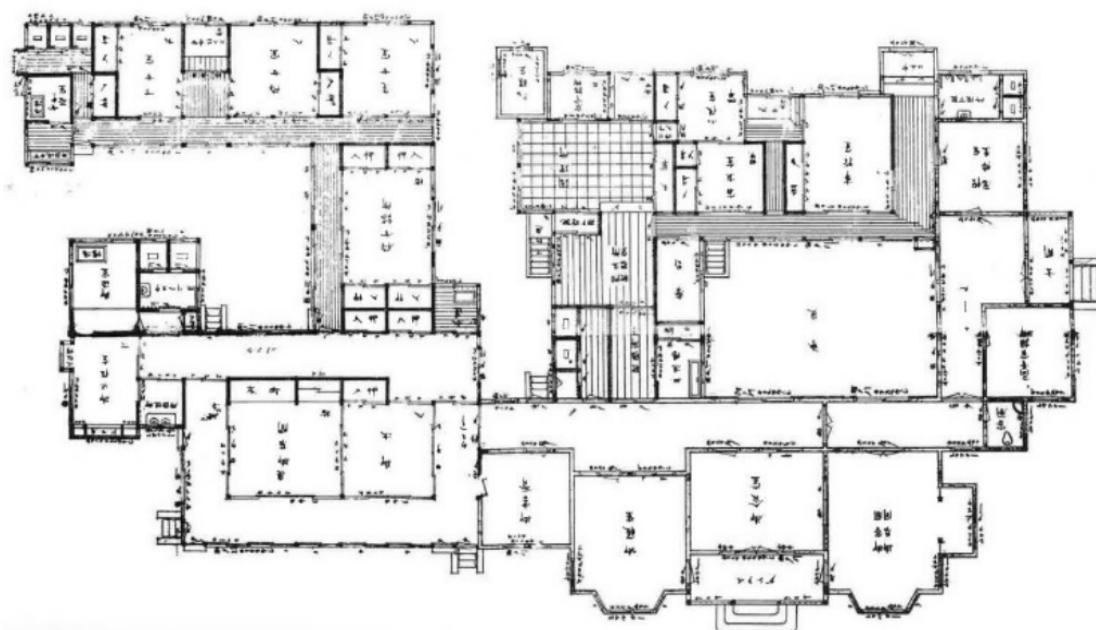


図 大磯滄浪閣御別邸改築平面図

(東京都立中央図書館木子文庫蔵)

旧大隈重信別邸・旧古河別邸

- 大隈重信が明治30年(1897)に大磯に購入した邸宅で、一部増改築がなされているものの、ほぼ往時の姿を留めている。
- 明治34年(1901)に古河市兵衛(古河財閥創業者)に売却されたことから、その後は古河別邸や民間企業の迎賓施設として維持管理が続けられてきた。



大隈重信（国立国会図書館提供）

明治31年（1897）、憲政党を結成し、総理大臣として日本初の政党内閣を組織。早稲田大学の前身となる東京専門学校の創立者（明治15年創立）。



1992年の旧大隈重信別邸 手前は神代の間外観

（出典：大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992）

旧大隈重信別邸・旧古河別邸の諸元

項目	現存邸宅
敷地規模	約8,000坪(旧大隈重信別邸・旧古河別邸の敷地共)
延床面積	約363m ² (約110 坪)
建築年	明治30年(1897)以前
構造	木造平屋建 寄棟金属板瓦棒葺(元は寄棟草・瓦葺)
設計者	不 詳
施工者	不 詳



富士の間（2018年撮影）



神代の間外観（2018年撮影）



土蔵（2018年撮影）

旧大隈重信別邸・旧古河別邸の現況

- 現存の邸宅は、既存の邸宅を大隈重信が購入したもので、明治30年代初頭の家屋図によれば、主屋は茅葺で、主屋南西隅には土蔵が付属していた。
- 大隈別邸時代に台所と浴室が増築。古河家へ引き渡された後は、水廻りの改変（減築）が行われ、昭和27年（1952）から39年（1964）の間に土蔵が現在の位置へと変わり（移築かどうかは不明）、屋根が茅葺から金属板葺に改変されたと推定。また、近年には富士の間に続く縁側の拡張も行われている。
- 一部改変が見られるものの、「神代の間」をはじめとする主要範囲はオリジナルが残る。

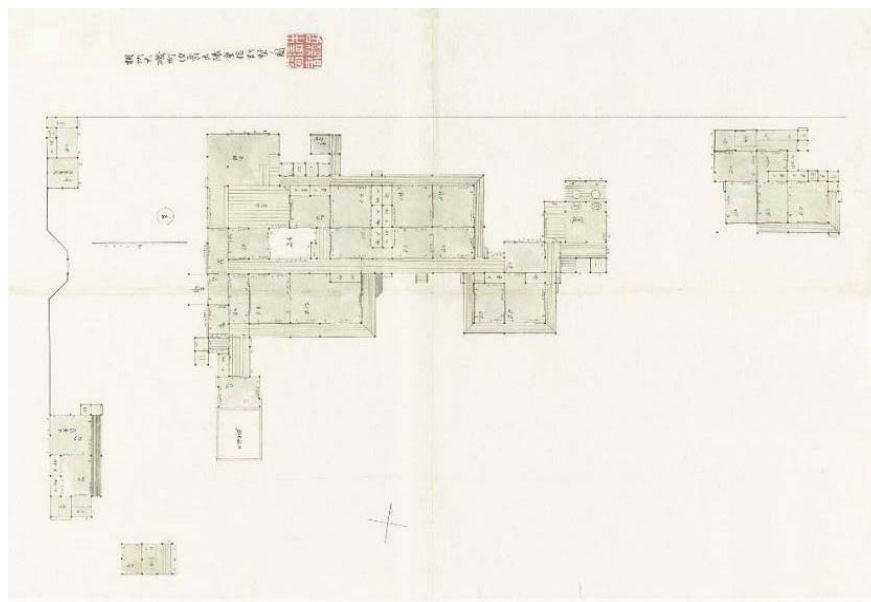


図 相州大磯町伯爵大隈重信別墅ノ図（明治40年以前）
(東京都立中央図書館木子文庫蔵)

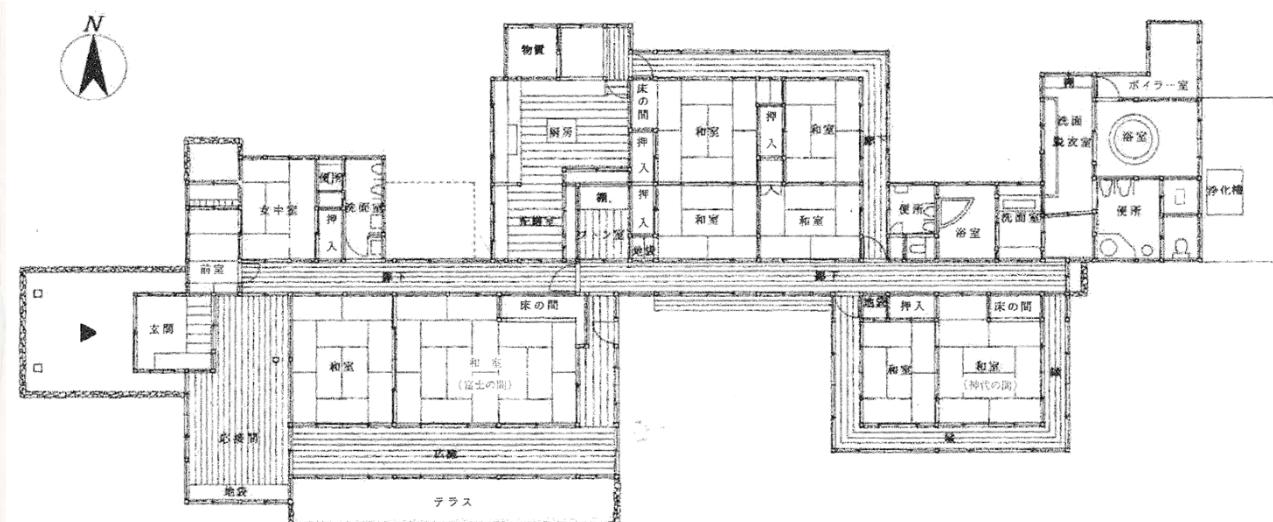
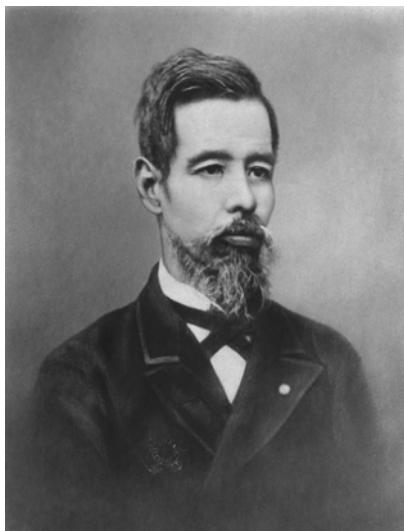


図 旧大隈重信別邸・旧古河別邸平面図
(出典:大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992)

- 伊藤内閣の外務大臣であった陸奥宗光が、明治27年(1894)に、病気療養のため大磯に建築した別邸。
- 陸奥の没後、次男(潤吉)^{じゅんきち}の養子先である古河家の別邸となつたが、関東大震災で、一部が大破したため、改築されたと言われており、改築後の古河別邸が現存している。
- 旧大隈別邸とともに、古河別邸として使用された後、民間企業の迎賓施設として維持管理が続けられてきた。



陸奥宗光 (国立国会図書館提供)



1992年の旧陸奥宗光別荘(聴漁荘)



玄関にかかる聴漁荘の偏額

(出典:大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992)

明治17年（1884）、憲法等の調査で渡欧。
第2次伊藤内閣（明治25年8月～29年8月）の外務大臣に就任し、不平等条約である治外法権の撤廃を実現。

改築後にたてられた古河別邸の建物は太田晦巖(1879～1946)により「聴漁荘」と名付けられた。玄関に揮毫に係る偏額が掲げられている。

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	約1,682m ² (509坪)	約8,000坪(旧大隈重信別邸・旧古河別邸の敷地共)
延床面積	約317m ² (96坪)	約363m ² (約110坪)
建築年	明治27年(1894)	大正14年(1925)
構造	木造 草・瓦葺	木造 寄棟桟瓦葺
設計者	不詳	不詳
施工者	不詳	不詳



和室（2018年撮影）



陸奥別邸跡と庭園（2018年撮影）



陸奥別邸跡外観（2018年撮影）

陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸の現況

- 明治30年(1897)の家屋図によれば主屋は茅葺の邸宅で、その他に1棟の居宅、1棟の物置が付属していたが、現在は主屋以外の物置等は撤去されている。
- 大正13年(1924)の改築以後、土蔵が増築され、一部開口部や壁の改変は見られるものの、保存状態が良く、当時の姿をよく留めている。

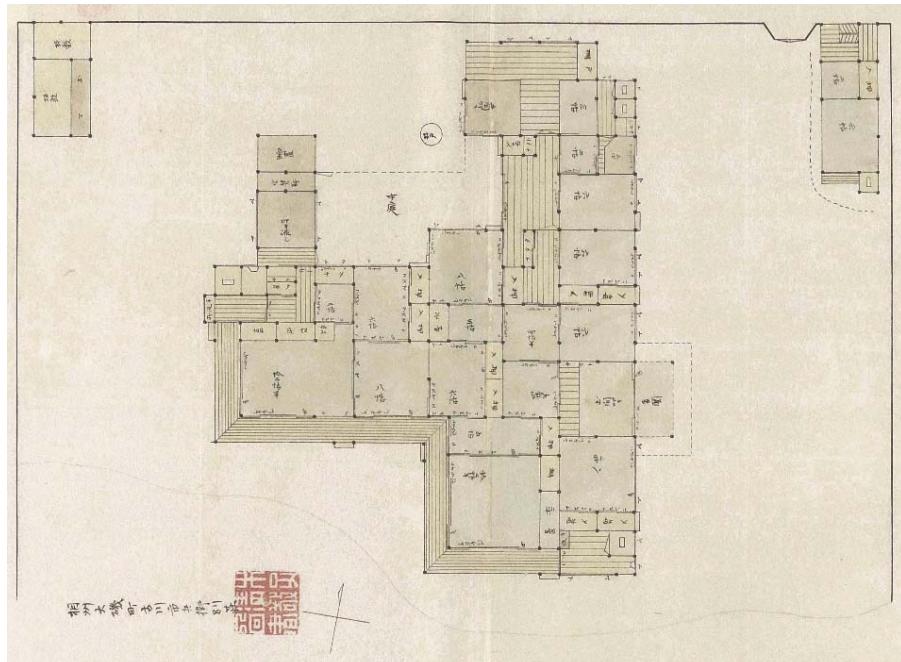


図 相州大磯町古河市兵衛別荘(明治40年以前)

(東京都立中央図書館木子文庫蔵)

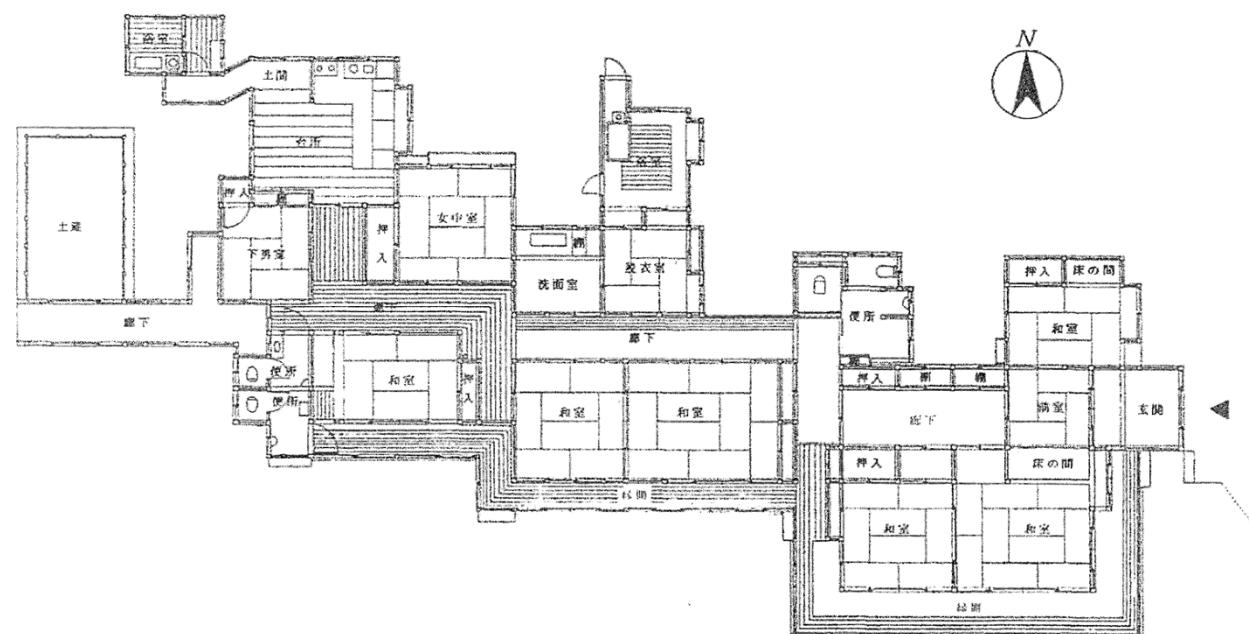


図 陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸平面図

(出典:大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992)

西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸

- 西園寺公望が明治32年(1899)、伊藤博文の紹介で大磯に別邸を所有。滄浪閣の隣に位置することから「隣荘」と名づけられたと言われている。また、「陶庵」と呼ばれたとも言われている。
- 現在は、大正6年(1917)に別荘を譲り受けた池田成彬(大蔵大臣経験者)が、建築家中條精一郎に設計を依頼し、昭和7年(1932)に建築した洋館及び車庫が、ほぼ往時のまま残されている。
- 池田の没後は、民間企業の厚生施設として利用されたが、昭和50年代以降は利用実績がなく、敷地内は荒廃が進んでいる。



西園寺公望 (国立国会図書館提供)

明治15年(1882)、伊藤博文と憲法調査で渡欧。明治時代に就任した最後の総理大臣(明治44年8月～大正元年12月)。最後の元老として政界に大きな影響を与えた。



明治期の西園寺公望邸「隣荘」 (年代不明)

(出典:大磯教育委員会『大磯のすまい』1992)

項目	前身邸宅	現存邸宅
敷地規模	不詳	約14,520m ² (約4,400坪)
延床面積	不詳	約815m ² (約247坪)
建築年	不詳	昭和7年(1932)
構造	木造 茅葺	RC造(一部木造) 寄棟瓦葺
設計者	不詳	中條精一郎(曾禰中條建築事務所)
施工者	不詳	竹中工務店



明治期の西園寺公望邸「隣荘」（年代不明）



旧池田成彬邸南側外観:1992

(出典:大磯教育委員会『大磯のすまい』1992)

西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸の現況

- チューダー朝英國風で、漆喰の壁に木のフレームが印象的なハーフティンバー様式の意匠を採用するなど、西洋的な造りから、内部は基本的に靴のまま利用していたと推定される。
- 老朽化が進んでいるものの、間取り等の改変はなく、竣工時の姿を良く留めており、往時の調度品や照明器具も残されている。



池田邸 庭園（年代不明）



池田邸 車寄（年代不明）



池田邸 客間（年代不明）

出典：中條建築事務所『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』池田氏大磯別邸.1939

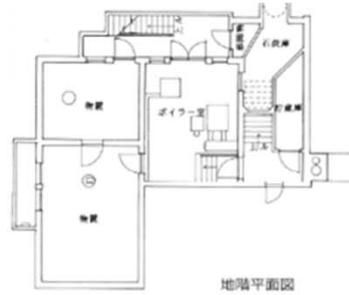
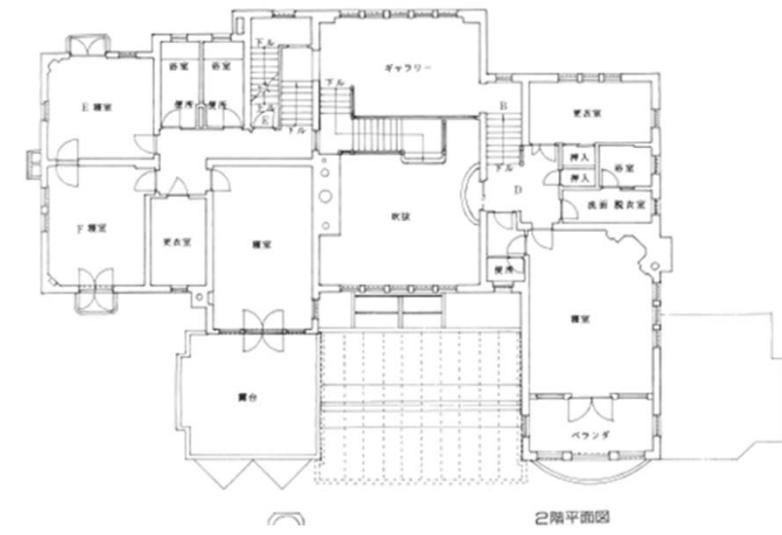
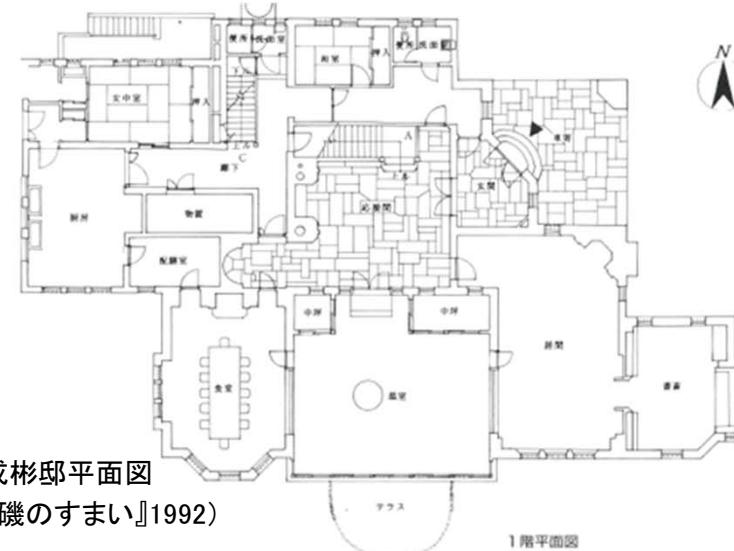


図 西園寺別邸跡・旧池田成彬邸平面図
(出典:大磯町教育委員会『大磯のすまい』1992)



① 明治記念大磯邸園の概況、大磯について、邸宅概況

② 明治記念大磯邸園基本計画の概要

基本理念及び基本方針

基本理念

明治150年を迎えるにあたり、国は、地方公共団体等と連携し、我が国の近代化の歩みを次世代に遺すため、「明治150年」関連施策を推進することとした。

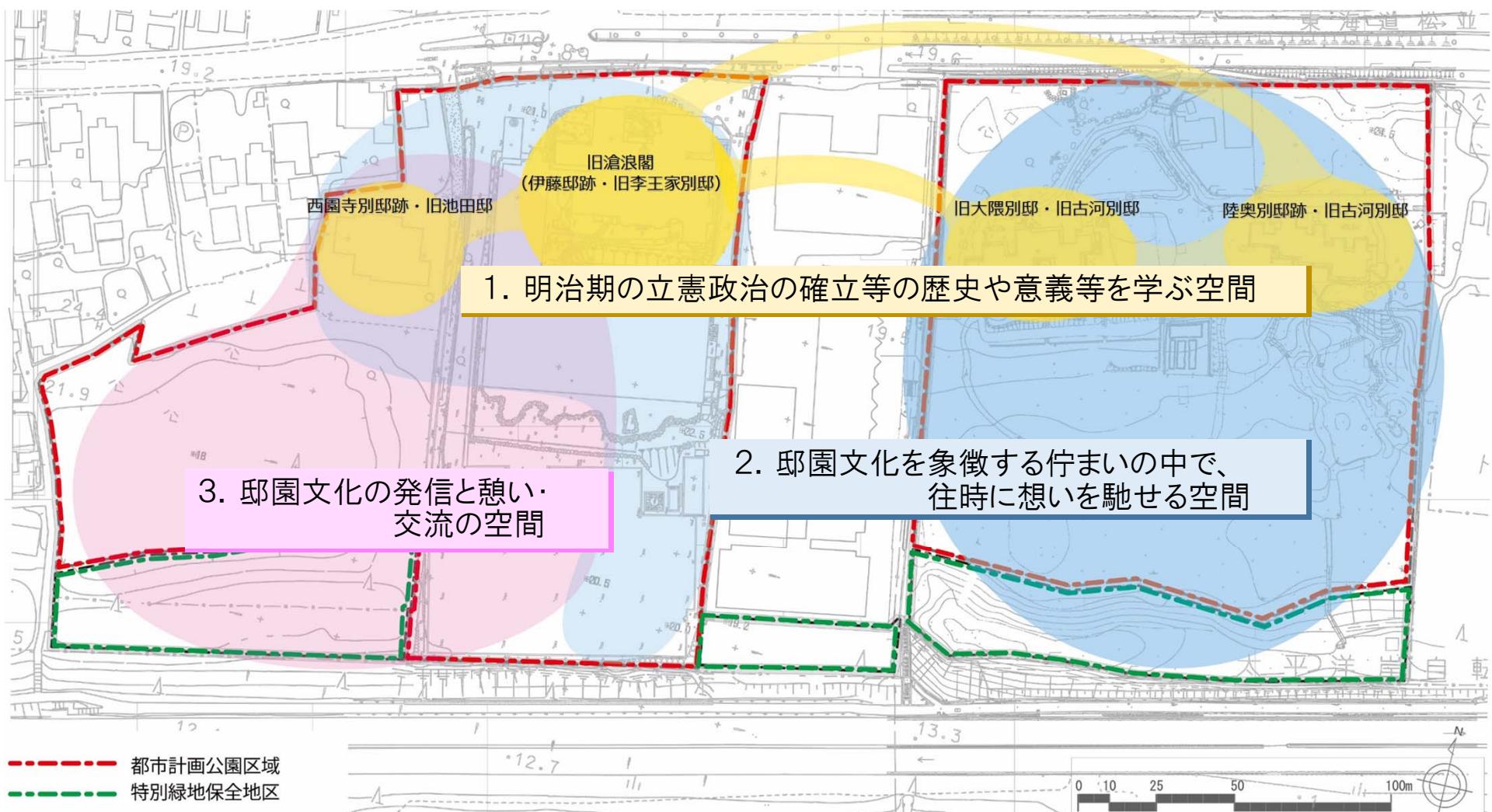
明治記念大磯邸園は、この施策の一環として、多様な主体が連携し、明治期の立憲政治の確立等に貢献した人物の邸宅や周辺の緑地等が集中する希有な場を、積層する歴史を今日に伝える佇まい(風致)として一体的に保存・活用し、立憲政治の確立等に関する歴史やその意義を後世に伝えるとともに、湘南の邸園文化の象徴として、文化の発信や、憩いと交流の拠点となる場を創出するものとする。

基本方針

- 1.明治期の立憲政治の確立等の歴史や意義を伝える
- 2.湘南の邸園文化を象徴する佇まい（風致）を保全する
- 3.歴史的遺産を活用した文化の発信、憩いと交流の拠点を創出する

基本理念及び基本方針を実現するため、「明治期の立憲政治の確立等の歴史や意義等を学ぶ」、「邸園文化を象徴する佇まいの中で、往時に想いを馳せる」及び「邸園文化の発信と憩い・交流」の役割を担う3つの空間を設定。

邸宅及び庭園の立地、積層する歴史、現況等の特徴を踏まえ、各空間の中心的な役割を担う邸宅の区域を設定し、これら区域が重なり合いながら、各邸宅等が相互に連携する空間構成とする。



空間構成計画 【1. 明治期の立憲政治の確立等の歴史や意義等を学ぶ空間】

明治期の立憲政治の確立等の歴史や意義等を学ぶことができるよう、旧滄浪閣の区域を中心に、各邸宅等が相互に関連付けられた複合的な歴史的資料の展示や学習の場となる空間とする。

旧滄浪閣の区域には、本邸園のエントランス及びガイダンス機能を有する空間を配置し、本邸園を回遊しながら学ぶことのできる空間構成とする。



▲エントランスとガイダンス空間イメージ



▲旧滄浪閣の庭園のイメージ



旧滄浪閣(伊藤邸時代の西洋館部)



旧滄浪閣(旧李王家別邸、1992年頃)



増改築された様子(2018年撮影)

■旧滄浪閣の特徴

- ・立憲政治の確立に最も貢献した人物の一人といわれる伊藤博文が本邸としていた場。
- ・本邸園の中央部に位置し、本邸園で最も大きな邸宅面積を有している。
- ・現存する邸宅は、伊藤博文の没後に譲渡された李王家が、関東大震災（大正12年（1923））後に建て直したもので商業目的等のために大きく増改築されている。

空間構成計画【2. 邸園文化を象徴する佇まいの中で、往時に想いを馳せる空間】

旧大隈別邸や陸奥別邸跡の区域を中心に、積層する歴史を踏まえつつ各邸宅や庭園の保存・修復等を行うとともに、松林の保全・再生や海への眺望を確保することにより、湘南の邸園文化を象徴する佇まいの中で、邸宅から庭園を眺めたり、海を感じながら散策したりするなど、往時に想いを馳せ、先人の息づかいを感じられるような空間とする。



▲旧大隈別邸から眺める庭園イメージ



▲陸奥別邸跡から眺める庭園イメージ



旧大隈別邸
神代の間外観(2018年)



陸奥別邸跡の庭園
及び邸宅外観(2018年)

■旧大隈別邸・陸奥別邸跡の特徴

- ・旧大隈別邸は、明治30年（1897）に大隈重信が所有し、古河家に譲渡されて以降、屋根改修や一部増改築がされているものの、改変が少ないとことから、明治期の姿を今によく残している。
- ・陸奥別邸跡は、陸奥宗光の没後に古河家の所有となり、大正12年（1923）の関東大震災で一部倒壊したものの、古河家の別邸として原型の一部を残すように再建されたと言われ、今日まで良好な状態で保存されている。
- ・旧大隈別邸には芝庭があり、陸奥別邸跡の前には日本庭園が広がるなど、邸宅に加え庭園も比較的良好な状態で残されており、庭園が邸宅を引き立て、落ち着きのある雰囲気を醸し出している。

空間構成計画 【3. 邸園文化の発信と憩い・交流の空間】

西園寺別邸跡の区域を中心に、散策や休憩をするための園路や休憩施設を設けることで来園者や地域住民の憩いの場を確保するとともに、交流イベント等が開催できる多目的な広場等を設けることで、交流の活性化や新たな文化の発信につながるような空間とする。



▲憩い・交流の空間イメージ



池田別邸
庭園側
(撮影年代不明)



池田邸客間
(撮影年代不明)

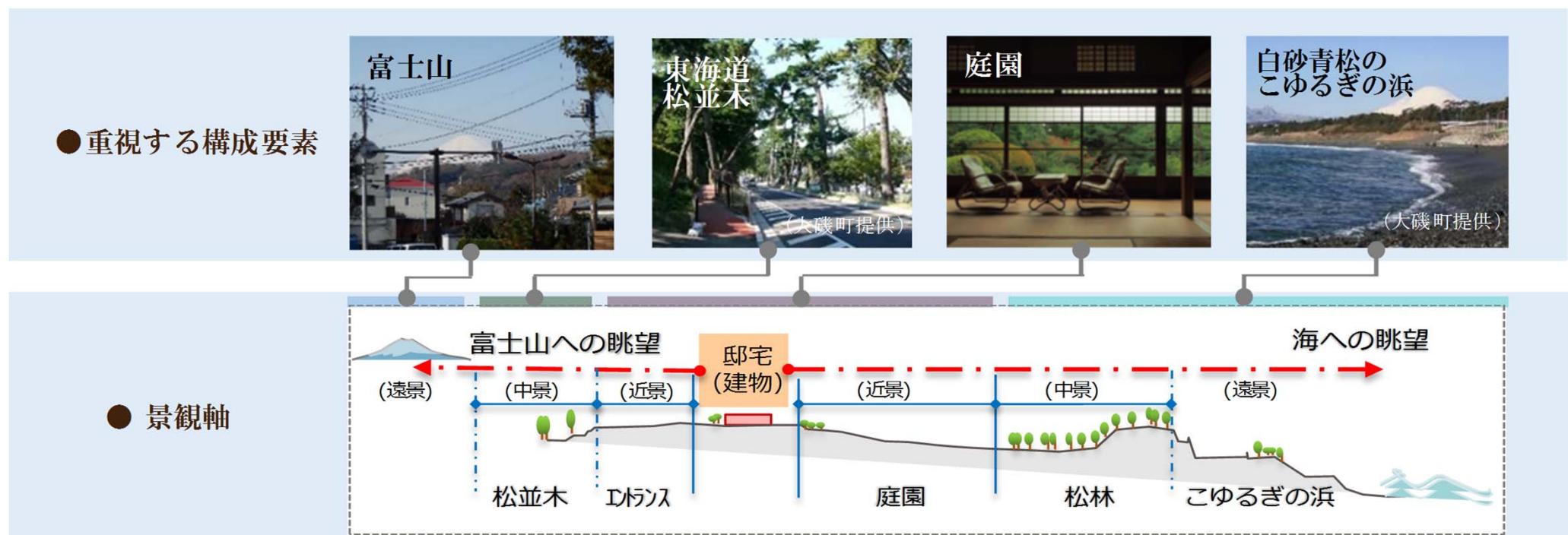
(出典：中條建築事務所『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』池田氏大磯別邸.1939)

■西園寺別邸跡の特徴

- ・西園寺別邸跡・旧池田成彬邸は、池田成彬が昭和7年（1932）に別邸として建てた邸宅。明治期の建物ではないものの、西洋文化が取り入れられた大正・昭和初期の洋館の姿を色濃く残している。また、内部の調度品や照明器具も当時のまま残されている。
- ・テラスを通じて庭園と邸宅を行き来することができる造りになっている。
- ・現在、邸宅地の樹林は過密化しており、庭園の佇まいは感じられない状態となっている。

湘南の邸園文化を象徴する歴史的遺産として、本邸園の風致の保全を図るため、重視する構成要素と景観軸を設定し、以下の取組みを行う。

- ・本邸園内の近景である邸宅や庭園の修復、中景である松林を保全。旧滄浪閣の区域等の歴史的景観が失われた空間については、庭園や松林の再生する。
- ・各邸宅の特徴を踏まえて視点場と景観軸を設定し、こゆるぎの浜から相模湾への眺望、富士山への眺望を確保する。
- ・本邸園のエントランス等の東海道（国道1号）に面する空間においては、松並木等の歴史的景観との調和を図る。



- 旧滄浪閣(伊藤博文邸跡・旧李王家別邸)
 - ・旧李王家別邸を保存・修復し、明治期の立憲政治の確立等に関する歴史的資料の展示や学習等の場として公開。
 - ・伊藤博文邸時代の花庭や松林を一部再生し、伊藤博文が建てた四賢堂跡の標示等を整備。

- 旧大隈重信別邸・旧古河別邸、陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸
 - ・旧大隈重信別邸(明治中期)、陸奥宗光別邸跡(大正後期)を保存・修復し、ゆかりのある資料を展示、公開。必要に応じて往時の姿の復原も検討。
 - ・現存する庭園(古河別邸時代)の修復や、松林の保全を行い、先人の暮らしに想いを馳せる空間を整備。

- 西園寺公望別邸跡・
旧池田成彬邸
 - ・旧池田成彬邸(昭和初期)を保存・修復し、公開。
 - ・池田邸時代の芝庭を修復し、過密化した樹林を明るく開けた松林へと保全。樹林の一部に交流広場を整備。
 - ・休憩や飲食・物販の機能を導入するなど、来園者が快適に過ごすことができる場とする。

